

朝日選書

356



朝日新聞社編

世界名作の旅

下

朝日新聞社編

世界名作の旅 下

朝日選書 356

世界名作の旅 下

朝日選書 356

1988年6月20日 第1刷発行

定価1200円

編 者 朝日新聞社 編
発行者 八尋舜右
印刷所 共同印刷
製本所 清美堂製本
発行所 朝日新聞社



〒104-11東京都中央区築地5-3-2 電話03(545)0131(代表)
編集・図書編集室 販売・出版販売部 振替・東京0-1730

©Asahishimbun 1988 Printed in Japan

装幀・多田進

ISBN 4-02-259456-X

目次

レマルク 凱旋門

3

エミリ・ブロンテ 嵐ヶ丘

11

魯迅 『藤野先生』と『故郷』 『阿Q正伝』

19

ドライサー アメリカの悲劇

33

シヨロホフ 静かなドン

42

ラックスネス 独立の民

49

グリーン 第三の男

57

ルソー 告白

65

アンネ・フランク アンネの日記

80

ゴッホ 手紙

88

ハイネ 歌の本

カフカ 城

デ・アミーチス クオレ

デュマ モンテ・クリスト伯

グリム兄弟 ヘンゼルとグレーテル

パール・バック 大地

トーマス・マン 魔の山

バルザック 谷間のゆり

メーリケ 旅の日のモーツァルト

スタンダール 赤と黒

フランクリン フランクリン自伝

曹雪芹 紅樓夢

ラーゲルレーフ ニルスのふしぎな旅

102

109

118

126

139

146

153

161

169

178

194

202

209

モーパッサン 女の一生

ハドソン 緑の館

O・ヘンリー 最後の一葉

ドーデ 風車小屋だより

アリストパネス 女の平和

ヒルトン チップス先生さようなら

ユゴー レ・ミゼラブル

屈原 離騷

レールモントフ 現代の英雄

マロ 家なき子

ディケンズ 二都物語

モンゴメリイ 赤毛のアン

シェークスピア ハムレット

フロベール　ボバリー夫人

332

シュピーリ　ハイジ

339

スコット　アイバンホー

347

ウィリアムズ　欲望という名の電車

355

「世界名作の旅」は、昭和39年11月1日から昭和41年8月まで、朝日新聞に連載され、昭和41年、朝日新聞社から単行本（全四巻）で刊行されました。

世界名作の旅
下

エリツヒ・マリア・レマルク

凱旋門

はじめに——その夜、パリは雨模様で暗い。ナチス・ドイツから亡命して来た医者のラビツクは、セーヌ川にかかる橋の上で、ガラスのようにうつるな表情をしているひとりの見知らぬ女に声をかける。「どこへ行くんです。夜、ひとりで、パリの街をいま時分?」。その女ジョアンもまた、彼と同じ孤独な放浪者。母国ルーマニアをのがれて来た身よりのない歌い手だった——。エリツヒ・マリア・レマルク（一八九八—一九七〇）の小説『凱旋門』（がいせんもん）は、第二次大戦の危機が迫り騒然としたパリを舞台にして、二人の主人公のこうした出会いから物語が始まる。

レマルクの作品には、有名な処女作『西部戦線異状なし』（一九二九）をはじめ、どの作品にも、二度の世界大戦の悲劇が黒い影を落している。彼が描くのはいつも、戦争の犠牲となり歴史の激流に押流されていく名もない人びとの運命、その深い悲しみと憤りだ。彼の作品が国境を越え、広い共感を得ている理由も、ここにある。

レマルクは、ドイツのライン川流域ウエストファーレン州に生れた。一九一六年、十八歳のとき学徒兵として第一次大戦に参加、西部戦線で五度も傷を負った。青年の目にうつった戦場

のきびしい現実。すりきれた軍服、弾雨の下のが狂いそうな恐怖、ぬかるみとのなかで無意味に血を流し死んでいく多くの戦友たち……。この体験をもとに戦争の幻滅絶望を描いた『西部戦線異状なし』は、発表後たちまち世界的なベストセラーになった。

ナチ政権が興るとともにレマルクは要意人物のリストにあげられ、一九三八年にはドイツの国籍を奪われて国外に追放、スイス、アメリカを放浪ののち、翌三九年アメリカで市民権を得る。『凱旋門』は、この亡命生活をもとにして大戦後の一九四六年に発表したもの。ふたたび世界的な反響を呼び、ハリウッドで映画化もされた。日本でも昭和二十二、二十三年、連続してベストセラーの上位を占めた。

さて、初めての出会いのあと、ラビックとジョアンは、未来への希望もないまま愛しあう。だが、ジョアンは不安におびえるように次々と男をわたり歩き、ラビックはもぐりの医者としてかろうじて生活費を得ている、不安定な日々である。偶然、ラビックはパリの町かどで、ドイツで彼を拷問し、愛人シビルを虐殺したゲシュタポのハーケの姿を見かけ、計画的に彼を殺して報復をとげる。そのころジョアンは愛のもつれから男に撃たれ、ラビックにみとられながら死ぬ。恐れていた大戦がついに起る。パリでも不法入国者たちの取締りが始り、ラビックも検束される……。文中の引用は、山西英一氏の訳による。

六五年の春から秋にかけて、パリを訪れた観光客は、おめあてのひとつ、凱旋門が緑色のカバーでおおわれているのに、失望したにちがいない。アンドレ・マルロー文化相のお声がかりで、パリじゅうの建物から黒ずんだアカを洗い落すことになり、凱旋門や、ノートルダム寺院でも、その作業が

始まったからである。

秋のおわり、シャンゼリゼ通りに落葉が舞うころ、カパーは取除かれ、白くなった凱旋門が姿を見せた。美的センスにうるさいパリジャンが、黙っているはずがない。

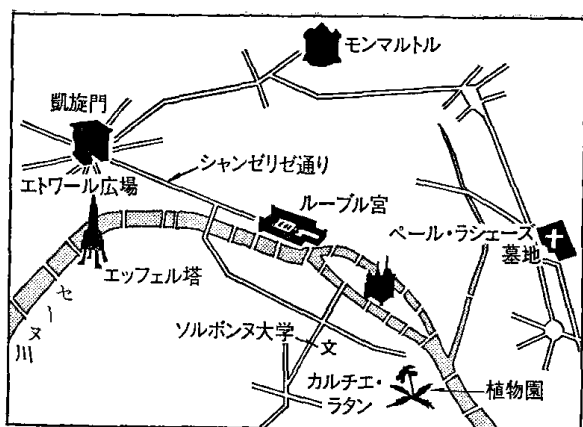
「これこそ、光り輝くとたたえられたパリ本来の姿」と、ひとりが言えば、「なんだか、ふとつちよの女性を連想させるね」と、ひとりとは肩をすくめた。パリのシンボルだけに、論議はやかましかった。終戦直後、世界的なベストセラーとなったレマルクの『凱旋門』は、むろん、凱旋門がまだ黒かったころの物語である。

——第二次大戦前夜のパリ。ナチの圧迫をのがれ、ヨーロッパ各国から、多くの亡命者が流れ込んできた。そのひとりドイツ人の医者ラビックと、身寄りのない歌手ジョアンとの、未来のない愛の物語。背景には、凱旋門がいつもその巨大な姿でそそり立っている。

ラビックとジョアンの心が呼びあうとき、凱旋門は細い雨のなかにやさしくけむり、二人の愛に破局が近づく日、この石の門は銀色の月のしたで墓石のように冷たく光る。そして、ラストシーン、第二次大戦が火を吹き、ラビックが不法入国者として検束された夜、凱旋門は、ヨーロッパをおおう悲劇の象徴のように、黒々とヤミのなかに包まれている。

凱旋門はどっしりと重く、歴史にもてあそばれる人間の運命はもろい。見事な舞台効果だった。

しかし、パリは、今日でも、母国に背を向けた人びとが、影のように集る都会であることに変わりはない。パリの人口五百万、そのうち正規に登録されている者、いない者を含めて約四十万の外国人が



いるといわれている。

革命前はロシアの大地主だったとウワサされる老紳士、ルーマニアから亡命してきたエンジニア、日本語をしゃべりたがらない日本人の画家……。こうした人びとが、古い石づくりの建物のかげで、過去の傷をいたわりながら暮している。好奇心は強いが、他人の生活には干渉しないのが、パリの美風だ。それが、この人々を安心させる。

私は、パリで、何人かの現代のラビック、つまり、なんらかの理由で祖国を失った人びとに出会った。

シャンゼリゼの、喫茶店で落合った『ポーランド通信』の記者スザルスキー氏(暁)は、物腰はおだやかだったが、言葉ははげしかった。「亡命は、敗北ではありません。勇気のいる行為です」。

彼はポーランドの現在の社会主義政権に反対して、「自由ポーランド」の主張を掲げ、パリとロンドンで刊行されている新聞で働いていた。その信念のためか、黒い

髪は年齢よりも七つ八つ若く見えた。

「私たちの国の歴史をご存じですか？ 何世紀もの間、ロシア、ドイツ、スウェーデンに常に支配されてきました。祖国の独立を叫ぶ者は、父親の時代も、いつも亡命者だったのです。シヨパンをごらんください。彼は十九年間、祖国の栄光を夢みながら、パリで客死しました。ペール・ラシェーズの墓

地に埋葬されるとき、友人たちは棺にポーランドの土をかけました」

そのスザルスキー氏も、祖国を出て二十年がたつ。国と国が相接し、宗教や思想がぶつかりあい、侵しあい、奪いあう。これがヨーロッパの血みどろの歴史だ。ここでは亡命はさして異常なことではない、と彼は語った。

彼はフランス人と結婚し、十八歳と十七歳の娘はフランス国籍である。その娘から、最近、彼は深い衝撃を受けた。

「この夏、娘たちはポーランドに旅行しました。美しい風景や人情に感激したようですが、その口ぶりはまるで外国のことを話すようでした。私は自分の家庭を愛します。しかし、ポーランド人は、結局、私だけだと知りました」と静かに笑った。

冬の日短く、窓の外では、夕暮れのひえびえとした灰色の町を、車の赤い尾灯がいくつも通り過ぎた。それを見る彼の横顔が、急に老いたように思えた。

彼が生きる証明として半生を注ぎこんだ祖国。その祖国が父と娘との間で消えていこうとしている。これが、亡命者の運命であり、血と血がまざりあうヨーロッパかもしれない。

長い歴史的関係から、パリにはベトナム人が多い。南ベトナムの青年D君は、モンマルトルの坂道にある薄暗いアパートに住んでいた。風通しの悪い細い階段に、安っぽいチーズ料理のにおいがただよ、老人のひきずった足音が響くようなアパートだった。D君は三十二歳。普通なら青年とは言えない。だが、彼の人生はどこかで中ぶらりんになっていた。

サイゴンの豊かな実業家の家庭に育ったD君は、十七歳のとき留学生としてパリに来了。「初めは

七年間の留学の予定で、物理学を勉強しました。でも、学業を終えたとき、政情が不安だから帰国を見合わせるようにと、父親から手紙が来ました」

D君は、待った。だが、翌年も、その次の年も、事情はさらに悪化した。やがて戦争——。国へ帰ることは、青年にとって、戦場での死を意味した。

親からの送金も次第に制限され、間もなく絶えた。D君はいま英国人の貿易会社で雑役夫として働いている。祖国で役立てるはずだった物理学の知識は、むなしく埋もれたままである。

「国のことを忘れようと思うときもあります。母国での苦しみを避けている私には、国の将来について発言する権利はありません。しかし、ベトナム人自身が選んだものなら、どんな政体でもいい。戦争が終れば、やはり私はすぐベトナムへ帰ります。今のままでは、ベトナムも、私も、ダメになるばかりです……」。はだがややカッ色なのを除くと、日本人によく似たD君の顔が、苦痛でゆがんだ。長い不幸な歴史の習性からか、アジア人には暗い悲壮な表情がよく似合う。それが、同じアジア人として、私は悲しかった。

小さな窓、粗末なベッド、乱雑に置かれた洗面具。室内には一冊の本も見当らない。ただ、マクラもとにある婚約者のドイツ娘の写真だけが救いだった。彼女はベトナムへ行くのを承知していると、D君は言った。

学生街のカルチエ・ラタンで会ったアメリカ青年のフアーナー君(三)の場合は、多分に気まぐれな自称「亡命者」だった。

腕力があり、楽天的な秀才だった彼は、故郷のオレゴン州のサバクのなかでの生活に退屈して、二年前に世界放浪を思いたち、まず先祖の故国フランスへ来た。だが、彼のようなタイプには、ヨーロッパでの生活が次第に窮屈になった。

そんなある日、フランスの学生と一緒にベトナム戦争反対のデモでアメリカ大使館へ押しかけたが、そこにひるがえる星条旗にものすごく親愛感を感じた。

ファーマー君は、自分がアメリカ人であることを再確認したのを収穫に、彼の「亡命」は早くもここでUターンしそうだった。

私はまた凱旋門に来た。

凱旋門は、エレベーターであがると、建物の内部が広々とした歴史記念館になっている。そこには、建造者ナポレオンのヨーロッパ制圧から始まり、第二次大戦のパリ解放の日、この門に三色旗を垂れおろして歓喜したパリ市民の姿まで、フランスの栄光をたたえる歴史画や写真が、ぎっしりと飾られていた。さらに、高さ五十メートルの屋上へ登ると、パリ市街は一望のもと。何組かの観光客が、しきりにシャッターを切っていた。

このとき、私は凱旋門が二つの顔を持っていることに気がついた。観光という「平和」の顔と、「国の栄光」という意識が生みがちな「戦争」の顔と——。いまは平和な観光客に包まれているが、世界のどこかで、いつまた「国家意識」という怪物があらわれだし、ラビックやジョアンの悲劇が繰返されないともかぎらない……。

凱旋門をたずねたついでに、カルバドスを飲まねばなるまい、と思いついた。ラビックとジョアンがいつもくみかわし、読者に忘れがたい印象を残す、あの酒の名だ。私は、エトワール広場に近い、小さな酒場にはいった。

その黄色い液体は、リンゴ酒と思えないほどクセのある臭みを残して、のどをひりひりと焼いた。ラビックの心の痛みのように、にがい酒だった。

池田 昌二